

方丈記

鴨長明（定武禮久訳）

序

流れ行く川の水はとだえることはないが、しかもこの水ではない。よどみに浮ぶ水のあわは、消えたり結んだりして、久しくとどまっているということはない。この世のなかにある人と住居も、やはり同じことなのである。

花の都の中に、棟をならべ、軒を競いあっている高貴な人の住居は代々続いて、なくならないものではあるが、さりとしてこれを本当かとはたねてみると、昔からある家は極くまれである。去年焼けて、今年作ったり、あるいは、大きな家が無くなつて、小さな家になつたりしている。その家に住む人間も、同じことで、場所も変わらず、

人も多いけれど、昔からいる人は、二三十人の中で、わずかに一人か二人に過ぎない。朝に死に、夕べに生まれる人の世のならいは、全くあの水のあわに似た様のである。

一体、生れたり死んだりする人たちは、どこから来てどこへ行ってしまふのであろうか。また、はかないこの世の仮の住居を、一体、だれのために心を悩まし、何ゆえに、見ばえをよくしようとするのだらうか。その主人と住居とが、たがいにはかなさを競うありさまは、朝顔に宿る露と変わるところはない。ある時は、露が落ちて花が残る。しかし花が残っても、朝日にあうと枯れてしまふ。あるいはまた、花がしぼんで、露がなおも消え残る。だが、たとえ消え残ったとしても夕方まではもつことはない。

二 安元の災害

私は、ものごころがついてから、四十年あまりの春秋を送った間に、世の中の不思議な出来事を体験することも、たびたびであった。去る安元三年四月二十八日のことであつたと思う。風がはげしく吹いて騒がしかった夜のことだつた。戌の時、つまり八時ごろ、都の東南の方から出火して、西北の方に燃え広がり、ついには、朱雀門・大極殿・大学寮・民部省まで焼け移つて、一晩のうちに灰燼に歸してしまつた。火元は樋口富の小路とかで、舞人を泊めていた飯屋から出たのだとのことである。

吹きすさぶ風に、あちこち燃え広がつていくうちに、扇を広げたように、末広がりとなつた。遠くにある家は煙にむせび、近い方ではは、ひたすら炎が地面に吹きつけた。空には灰を高く吹きあげたので、それが火の光に映つて、すべてが真赤になつているなかに、風のはげしさに堪えきれず、吹きちぎられた焰が、飛ぶようにして、一二町飛び越えながら移つてゆく。その中にいる人たちは、生きた

ここちもなかつただろう。あるいは、煙にむせんで倒れ伏し、あるいは、焰にまかれて、たちまち死んでしまった。身体一つだけでやっとなつて逃げたが、家財道具を持ち出すこともできず、貴重な財宝もすべて灰になってしまった。その損害は、いったいどれほどにのぼることであろう。

この大火で、高位の公卿の屋敷が十六軒も焼けたが、まして、そのほかの家などは数えきれないほど焼けたということだ。全部の都のうち、三分の一に及んだという。男女の焼け死んだ者は数十人。馬や牛などにいたっては、際限もないほどだ。

人間の営みは、みな、愚かであるが、その中でももつとも危い京の都の中に家を建てるといって、財産を使い、心を悩ますということとは、とりわけつまらないことである。

また、治承四年四月のころ、中御門京極の辺りから大きな旋風が起こつて六条あたりまで吹き荒れたことがあつた。三四町のところを吹きまくる間にあつた家は、大きいのも小さいのも、一つとして壊れないものはなかつた。そのまま平らにつぶれた家もあり、桁や柱ばかり残つたものもある。門を吹きはらつて、四五町も離れたところ置かれたり、また、垣根を吹きはらつて、隣家と一つになつてしまつたものもあつた。ましてや、家のなかの家財などは、みな残らず大空に舞いあがり、屋根の檜の皮や葺板の類いが吹き飛ぶ様子は、まるで冬の木の葉が風に乱れ舞うようであつた。塵が煙のように吹き立てたので、まったく何も見えず、ひどく鳴りひびくので、もの言う声も聞えない。あの地獄に吹くという業の風でも、これほどではあるまいと思われた。

家が損壊したのみではない。こわされまいと、防いでいた間に、身

体をいためて、不具になつてしまつた人も、数限りない。

この旋風は、南西の方に向つて行つて、たくさんの人々を嘆かせた。旋風はいつも吹くものではあるが、こんなことがあるのだろうか。これは、ただごとではない。何か神仏のお告げだらうかなどと、人々は疑い怖れたことであつた。

四 福原遷都

また治承四年六月のころ、急な遷都があつた。それは、まったく思いがけないことであつた。そもそも、この平安京の始まりについて聞いているところでは、嵯峨天皇の御代に都ときまつて以来、もう四百年余がたつている。よほどの理由がなくては、そうそう簡単に移してよいはずのものでもないから、この遷都を、世の人々は、心配し憂いを深めた。それは、まことにもつともなことだつた。け

れども、あれこれ言ったかいもなく、帝をはじめ、大臣や公卿たちも、ことごとくお移りになつてしまつた。官職に就いている人で、だれ一人として故里に残つていようという者はない。官位に思いをかけ、主君のおかげに頼つてゐるような人たちは、一日でも早く移ろうとはげみ、時世におくれ、世間からとり残されて、望みを持つるところがない者は、憂いを抱きながらも京にとどまつていた。

軒を争うように立ち並んでいた人々の住居は、日がたつにつれて荒れてゆく。家はこわされて、筏となつて淀川に浮かび、宅地はたちまちに畑へと變じていく。人心もすっかり改まつて、武家風に、馬と鞍ばかりを重んじ、牛車などを用いる人もいない。平家の勢力が強い西南海地方の領地を好み、関東東北の庄園は好まれないようになつた。

そのころ、私は丁度ついであつて、摂津の国の新しい都に行つたことがある。その地の様子を見ると、その土地は狭くて、平安京

の碁盤の目のような町割をするには足りず、北は山に添って高く、南は海が近くて下り坂になっている。波の音がいつもうるさく、潮風がことのほか激しい。内裏は山の中にあるから、天智天皇の頃の荒木作りの宮殿も、こんなふうであつたかと、なかなか風変りな様子で、趣きがあるようにも思われた。

毎日のように取り壊して、川もせましと運びくだした家は、一体どこに建てられたのであろうか。まだ空き地が多く、出来上がった家は少ない。旧き都はもはや荒れ果ててしまった一方で、新しい都はいまだできあがっていない。誰もが皆、空にただよう雲のように、落ちつかない気分であつた。もとよりここに住んでいた者は、土地を失つて憂いを深くし、新たに移つて来た者は、土木工事のわずらわしさに嘆く。道行く人を見ると、牛車に乗るはずのところを馬に乗り、貴族の衣冠・狩衣を着るはずの者がほとんど武家の直垂をつけている。京都の風習が急に改まつて、全く田舎くさい武士と異なる。

るところがない。このようなことは、世の中が乱れる前兆である、ものの本にしるされているが、日がたつにつれて、やはり世間が浮き足立ち、人心も落ちつかず、人々の憂いが遂に現実となつてあらわれてきたので、同じ年の冬、帝はもとどおり京都へお帰りになることになった。けれども、取り壊して運んだ家などは、いったいどうなつたことやら、みながみな、元のように戻らないままとなつてしまつた。

伝え聞くところでは、古えの賢君の時代には、憐れみを以て国を治められた。すなわち、宮殿に茅を葺いても、その軒先も切りそろえる手間をかけることなく、また、民のかまどの煙が乏しく苦しい様子をご覧になると、限られた年貢さえも免除されたという。

これらは、民に恵みをかけ、世を救おうとなされたからである。今の世のひどいありさまは、昔の時代の例と比べてみれば、よくわかるというものだ。

五 養和の飢饉

また、養和のころであつたか、久しい昔のことなので、はつきり憶えていないが、二年の間、飢饉が続いて、とても悲惨なことがあつた。春と夏はひでり続きで、秋に大風や洪水など、よくないことばかりがうち続いて、五穀の作物がまったく実りがない。夏に苗を植え、秋に刈り入れ、冬に蔵に納める賑わいは、皆目なかつた。

このため、諸国の人々は、あるいは自分の土地を捨てて故郷を出たり、あるいは家を離れて山中に住んだりした。さまざまな御祈祷がはじまり、なみなみではない修法などが行なわれたが一向に効き目がなかつた。

京の習わしは、何事につけても、暮しのもととは、すべて田舎をあてにやっているのに、物を持つてのぼつて来るものが絶えてしまつ

たので、そのようにいつまでも平気なふりをしておれなくなつてしまつた。思い悩みながら、さまざまの財物を、かたつぱしから捨てるように安く手放すけれども、それに目をくれるものもまつたくない。たまたま取り換えてくれる者は、金銭を軽んじ、穀物を重んずるばかりである。乞食が路傍にむらがり、憂い悲しむ声が、ここかしこで耳に入つてきた。

飢饉の初めの年は、このようにしてどうにか暮れた。翌年は何とか立ち直るのではないかと思つてみると、これに加えて、悪い疫病が発生し、もつと悲惨な状況になつてしまつた。世の中の人々がすっかり飢えてしまつていたので、日がたつにつれて、窮していく様子には、わずかなたまり水にあえいでいる魚のたとえが当てはまる。遂には、笠をかぶり、足を引き包んで、相当な身なりをした者が、ひたすらに家ごとにもらい歩く。このように困りきつた人たちは、歩いていくかと思つと、たちまち倒れ伏してしまふ。築地の傍らや

道ばたで、飢えて死んでいる者の類いは、数限りない。遺骸をどう片付けたものかわからないので、悪臭があたりに満ちみち、骸が変わり果てていく様子などは、目も当てられないことが多かつた。まして、賀茂の河原などには馬や車が行き交う道すらもないほどだつた。

いやしい者や木樵なども、力が弱つて、山から木を伐りださないから、都では薪さえ乏しくなつてきたので、頼みとする方面がない者は、自分の家をこわして、市場に持つて出て売る。しかし、一人が持つて出た薪の価は一日の命をつなぐに足りないくらいであつたという。奇怪なことには、この薪の中に、赤い丹塗りが付いていたり、金箔などがところどころに見える木片が交じつていたので調べてみると、困窮している者が古寺に行つて、仏像を盗んだり、お堂の道具をとりこわして、それらを割りくだいたものであつた。汚れ果てた末世に生れ合わせて、このような情けないことを見たので

あつた。

この時また、かわいそうなことかあつた。思いが深くて離れることのできない夫婦は、その恩愛の情がより深い者が、必ず先だつて命を落した。それは、自分は後にして、相手をいたわしく思うため、ごく稀に手に入れた食べ物をも、相手にゆずるからである。それゆえ、親子一緒にいる者は、決まつたように、親の方が先に死んだのであつた。また、母の命が尽きて死んでしまつたのも知らずに、幼い子供が、まだ乳房に吸いついて寝ていることなどもあつた。

仁和寺におられた隆暁法印という方が、こうして数えきれないほど死んでいくのを悲しんで、死者に出会うたびに額に「阿」の字を書いて、仏縁を結ばせる技を施された。その人数を知ろうと思つて、四月五月の二カ月の間、数えてみたところ、都のうち、つまり、一条から南、九条から北、京極から西、朱雀から東の、道ばたの人の頭は、すべてで四万二千三百あまりもあつたという。まして、その

前後に死んだ者も多く、また、京の河原、白川、西の京、その他諸々の辺鄙な土地などを加えて言えば、際限もなかったであろう。ましていわんや、全国の七道諸国まで含めれば想像もつかない。

崇徳院が御在位の時代、長承のころとかに、このような飢饉の例があつたと聞いているものの、その当時の様子はわからないから、実際に目のあたりにしたということは、めつたに出会うことのない経験であつた。

六 大地震

また、これも同じころだつたと思うが、ひどく大きな地震が起こつたことがあつた。その様子は、ただごとではない。山はくずれて河をうずめ、海は傾いて陸地をひたした。土が裂けて水が涌き出し、岩石が割れて谷にころがりこむ。海の渚で漕いでいた船は、波に漂

い、道行く馬は、踏みどころが定まらないほどであった。都近くでは、ここかしこの神社仏閣の建物は、ひとつとして無事なものはなく、あるいは崩れ、あるいは倒れた。灰燼が立ちのぼって、まるで盛大な煙のようであった。大地が動き、家が崩れる音は、まるで雷鳴のようである。家のなかにいると、たちまち押しつぶされそうになるので、外へ走りでると、地面が割れ裂ける。羽がないから、空を飛ぶわけにもいかず、龍ならば雲に乗ってでも飛べようが、人間ではそういうわけにもいかない。つくづく、恐ろしさの中でもとりわけ恐ろしいのは、地震のことだと痛感したことであった。

このようにひどく揺れることは、しばらくしてやんだけれども、その余震がしばらくは絶えず、いつもなら驚くほどの地震が、二、三十回揺れない日はなかった。十日、二十日と過ぎると、次第に間遠になって、あるいは日に四、五度、二、三度、もしくは一日おき、二、三日に一度などと、おおかたその余震が三月ほど続いただろう

か。

宇宙の四元素の中で、水、火、風については、常に害を及ぼすが、大地にいたっては、格別の異変を起さない。昔、斉衡年間のころとかに大地震があつて、東大寺の大仏のお首が落ちなどして、ひどいことがいろいろとあつたけれど、それでも、今回ほどのことではなかつたそうだ。

この地震の当座は、人々はみな、この世の常ではないことなどを言い合つて、いくらかは、人心の濁りもうすぐかと思われたが、月日が重なり、年月がたつてしまつた後には、地震の恐ろしさなど、口に出して語る人さえもなくなつてしまつた。

七 煩悩の俗世間

すべて世の中が暮しくくく、わが身と住居との、はかなく、頼み

にならぬありさまは、また同じことである。いわんや、それぞれの境遇によつて、心を悩ますことは、いちいち数えきれないほどである。

もし、自分がとるに足らぬ身分で、権門のかたわらに暮しを立てている者は、深く喜びごとがあつても、気がねして、思う存分楽しむことができない。また、嘆きが切実な時にも、声をあげて泣くことができない。立ちふるまいも落ちつかず、何ごとにつけてもびくびく怯えている様子は、たとえば雀が鷹の巢に近づいたときのようなものである。

もしも貧乏で、金持ちの家の隣に住んでいれば、朝晩、みすぼらしい身なりを恥じて、へつらいながら出入りをする。自分の妻子、使用人などが、金持ちをうらやんでいるありさまを見るにつけても、また、富豪の家の者が、自分たちをあなどっている気配を感じるにつけても、心は千々に乱れて、少しの間も休まることがない。

もしまた、都会の狭苦しいところに住んでいると、近くに火事があつた時、災害をまぬがれようがない。そうかといって、辺鄙な地に住んでおれば、往来にわずらわしく、盜賊の難儀も甚だしい。

また、権力者という者は、貪欲さが強く、後ろ盾のない者は他人から軽んじられる。財産があると、気をもむことも多いが、貧乏だと、他人をうらやむ気持ちができなくなる。他人の世話になると、我が身は他人のものになり、他人に情をかけると、心は恩愛にとらわれる。世間に順応すれば、窮屈であるし、世間のしきたりに従わないと、狂人さながらの扱いである。一体、どこに居場所を定め、どのような振る舞いしたら、しはしの間でも、心おきなくこの身をくつろがせ、わずかな間でも、心を休めることができるであろうか。

私自身は、父方の祖母の家を受け継いで、久しくそこに住みついていた。その後、縁者も亡くなり、身も落ちぶれ、思い出が尽きないことがいろいろ多かったが、とうとうその家に住み続けることができなくなってしまうた。そこで、三十歳を過ぎたところで、自分の心にしたがって、一つの庵をかまえた。これをもとの住居に較べると、わずかに十分の一である。ただ自分の寝起きする部屋をこしらえたのみで、立派な居を構えるようなことはなかった。わずかに築地塀は築いたけれど、門を建てるほどのものでもない。竹を柱として車寄せを作った。雪が降ったり、風が吹いたりすると、危なくないということはない。その場所が賀茂の河原のそばなので、水の危険もあり、また白波、つまり盗賊のおそれもあった。

よろずにつけて生きにくい世の中を耐えて過ごしながら、心を悩まし続けた三十数年であった。その間、物事がうまくいかないたび

ごとに、自ずと自分の持つ運のよくないことをさとった。そこで、五十の春を迎えたことをしおに、出家して、俗世間を捨ててしまった。もとより妻子がいないから、世を捨て難いきずもなく、また官職も俸禄もないので、特段の執着を留めるものもなからう。こうして、何の変化があるわけでもなく、大原山の山中に隠れ暮らして、またも五たびの春秋が過ぎていった。

九 方丈の庵室

ここに六十という露の命の消えぎわになって、また新しく露の葉の宿るような庵をむすんでみた。いわば、旅人が一夜の宿を作り、年をとった蚕の繭を作るようなものだ。これを、中年の頃に暮らしていた住居に較べると、その百分の一にも足りない。とかく言ううちに、年齢は年々高くなり、住居は次第次第にせまくなっていった。

その家の様子が、世間の尋常のものとは全く違っている。広さは、わずかに方丈、つまり四畳半。高さは、七尺たらずである。そこに住みつくときめたわけではないから、敷地をとることもない。土台を組み、屋根を葺き、その継目ごとに掛金をかけた。もし気分がそぐわぬことがあれば、すぐに他所へ移すためである。また建てなおすのに、どれほどの面倒があろうか。木材を車に積んでも、せいぜい二台にすぎない。車をひいてもらう礼をするほかには、何の費用もかかりはしない。

いま日野山の奥に姿を隠した後、庵の東側に三尺あまりの庇をさし出して、薪を燃やして炊事をするところにした。南側に竹の簀の子を敷き、その西の方に仏に水や花を供える闕伽棚をもうけ、北側には、ふすま障子を隔てて阿弥陀仏の絵像を安置し、そばに普賢菩薩の画像を添え、その前に法華経を置いた。東側の端の方には、わらびの穂を敷いて、夜の寝床とし、西南に竹の吊り棚をこしらえて、

黒い革籠を三箱をおいた。それには、和歌、音楽、往生要集などの書物の類を入れてあり、その傍らに、琴、琵琶をそれぞれ一張ずつ立てかけてある。折り畳んだり取り外しができるいわゆる折琴、継琵琶というのがこれである。仮の庵のありさまは、このような具合である。

なおその場所の様子を言うと、庵の南に懸樋があり、岩を立てめぐらして、水を溜めてある。林がすぐ軒から続いているので、薪をひろうのにも困らない。この山を音羽山と言う。まさきの蔓草がびっしりと茂っている。谷は木がよく茂っているが、西の方だけが開けているので、西方の極楽浄土を思い描くには不都合はなかった。

一〇 いおりの四季

春は、一面の藤の花房を見る。阿弥陀来迎の紫の雲のごとき様子

で西方に咲き匂う。夏は、郭公の声を聞く。その声を聞いたたびに、死出の山路の道案内を頼むぞと契りをかためる。秋はまた、ひぐらしの声が耳に満つる。それは、はかない空蟬のような世の中を嘆いているように聞える。そして冬には、降り積もる雪をしみじみとながめる。積もったり消えたりするさまは、人間の罪や欲念にも例えることができよう。

もし、念仏をとなえるのに気が進まず、読経に身がはいらない時には、気ままに休んだり自然にまかせて怠ったりするが、それをさまたげる人もなく、また恥ずかしく思う相手もない。ことさらに無言の行をしなくても、一人でいるから、口の禍いの罪を作ることもない。必ずや仏の禁戒を守ろうとするわけではないが、戒めを犯す環境にないのだから、何も破りようがないのである。

もし、古歌にいう「跡の白波」のようなはかない気分においでみるような朝には、はるかに宇治川に行き交う舟をながめて、そ

の歌の作者、満沙弥を気どり、あるいはまた、桂の風がその葉をならす夕暮れには、かの白楽天の尋陽の江で琵琶を弾じたという故事を思いやり、桂大納言源経信の風情をまねるのである。もし、もつと興がのれば、しばしば、松風の響きにさそわれて、秋風樂の曲を奏で、流れる水の音に、流泉の秘曲を弾ずる。つたないものではない。独りで奏で、他人の耳を喜ばせようとするわけではない。独りで奏で、独りで歌って、自らの心を慰めるだけのことなのである。

十一 山居の生活

また、この山のふもとに一軒の柴で葺いた庵があるが、そこには山守が住んでいる。そこに子供がいる。時々やって来て、お互いに顔を見せ合う。もし、所在ない気分するときには、この子を相手に遊ぶのである。かれは十歳、こちらは六十、その年齢はかけ離れては

いるが、心を慰めることでは、ふたりとも同じである。

あるときは、ちがやの花を抜き、岩梨をとり、ぬかごを盛り、芹を摘む。また、あるときは、山すその田圃におりて、落穂をひろい集めて穂組を作ったりもする。もし、うららかな日ざしだと、峰によじのぼって、はるかに都の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を眺める。景色のすぐれたところは持主がないから、いくら眺めても、気がねはいらない。

歩くのが苦にならず、もつと遠くへ行ってみたいと思う時には、ここから峰続きの炭山を越え、笠取山を過ぎて、岩間の観音にまいり、あるいは石山寺をおがむ。それからまた、粟津の原をふみ分けつつ、蟬丸の翁の旧跡をたずね、田上河を渡って、猿丸大夫の墓を訪ねる。帰り道には、季節によって、桜の枝を手折り、紅葉をもとめ、蕨を摘み、木の実をひろいなどして、仏に供えたり、みやげにしたりする。

もし、夜静かならば、窓辺の月に亡き人を偲び、猿のさけび声に袖を濡らす。草叢の螢は、遠く宇治の檜島のかがり火に見まごうほどで、暁に降る雨の音は、おのずと、木の葉を吹きちらす嵐のようにも聞える。山鳥がほろほろと鳴く声を聞けば、あれは父親だろうかそれとも母親だろうかと思いやり、峰の鹿が馴れて近寄って来るにつけても、世間から遠ざかっているほどを感じる。或いはまた、埋火をかき起こして、老の寢覚めの友とする。そんなに恐ろしい山でもないから、ふくろうの声などを、趣深く聞くにつけても、山中の風情は、折りにつけて尽きることがない。まして、より深く物事を考え、知識があるような人ならば、はるかにいろいろの楽しみが味わわれるであろう。

もともと、ここに住み始めた時は、ほんの少しと思っただけで、もうすでに五年もたった。仮の庵も、いくら古くなって、軒に朽ちた葉が深く積み、土台にも苔がはえた。ふと、何かの折に都の様子を耳にすると、私がこの山に籠つてのち、高貴な方がなくなつたのも多くあるということだ。まして、名もない人々については、数えきれないほどである。度々の火事で焼けてしまった家も、またどれくらいあるだろうか。

それを思うと、この仮の庵だけは、長閑で、何の恐れもない。家はせまいながら、夜に寝る場所もあるし、昼間すわるところもある。わが身一身を住まわせるのに何の不足はない。やどかりは、小さい貝殻を好む。それは身のほどをわきまえているからである。みさごという鳥は、荒磯に住む。それも、人を恐れるからだ。私もまた同じことなのである。身のほどをわきまえ、世間を知っているから、何かを求めてあくせくもしない。ただ静かなことを望みとし、憂い

がないことを楽しみとしている。

すべて世の人々が、住家を作るのは、かならずしも自分のためばかりではなく、あるいは妻子や一族のために作り、あるいは、親しい者や友人のためにも作る。時には、主人や先生、さらには財宝、牛馬のためにさえ、これを作る。わたしはいま、自分自身のために庵を結んだ。他人のためには作らない。なぜかといえば、今の世の姿、わが身のありさまでは、ともに暮らす者もなく、頼みとできる使用人もいない。たとえ広く作ってみても、そこに誰を住まわせ、誰を置くというのだろうか。

そもそも、世間で友人というと、金持ちなのをたつとび、恵みをかけてくる者を第一にする。かならずしも、情けが深いことや正直なことを愛するわけではない。そのようなことを考えるにつけ、音楽や自然の雅びを相手にしている方がよほどましだと思う。

また、使用人というものは、褒賞が厚く、恩恵を多くかけてくれ

ることが先になる。いたわって目をかけたりすることや、心の安らかな静かさなどということ、願うことはほとんどない。それゆえ、自分自身を使用人にするのが一番いいということである。どういふふうには使用人にするのかと言えば、もし、なすべきことがあれば、自分自身の身体を使うことだ。面倒くさくもあるが、他人を指図し、他人に気がねをするよりは、よほど気楽である。もし、歩かなければならない場合は、自分で歩く。苦しいかもしれないが、馬だ鞍だ、牛だ車だと心を悩ますよりも、はるかにましである。

今、身体全体を分けて、二つのはたらきをさせている。手の召使と足の乗り物とで、これは自分の意のままになる。身体の苦しきは知ることができるから、疲れた時は休ませ、元気な時は使う。使いはするが、度を過ぎすことはない。怠けるようなことがあっても、心をいらだたせることはない。その上、常に歩き、常にはたらくのは、健康をたもつ養生にもなる。だから、無為に休んでいることは

ない。他人を悩ませるといふことは、はなはだ罪つくりなことであるから、どうして他人の力を借りるべきといえようか。

衣食の類いも、またおなじである。藤蔓の皮の衣や麻の夜具などの粗末なものでも、手に入ったものは何でも身に着けて肌を隠し、野辺に生えている嫁菜や山になる木の実で、どうやら命をつなぎとめるばかりである。人と交わらないから、おのが姿を恥じて、後悔することもない。食物がとぼしいので、粗末なただきものをかえっておいしく味わうことができる。

すべて、このような楽しみは、富める者にむかって言うのではない。ただ自分自身にとつての、昔と今との生活を思いくらべて申し込んでいるのである。

一体、この世の中は、心の持ち方次第でどうにでもなるものである。心がもし安らかでなければ、多くの家畜や七色の宝なども役に立たず、立派な宮殿や楼閣も価値がない。今、私は、さびしい住居、

一間の庵を心からこれを愛する。何かのついでに都にでも出れば、わが身が乞食同然の姿となつたことを恥ずかしいとは思うが、帰つて来てここにいれば、世間の人たちが、俗塵にまみれて駆けまわっていることを憐れに思う。もし、わたしのこの言葉を疑うならば、魚と鳥とのありさまを見るがいい。魚は水に飽きないが、魚でなければその気持ちはわかるまい。また鳥は林にいたがるが、鳥でなければ、その心持ちはわかるまい。世間から離れて独り静かに暮らすあじわいも、またおなじことなのである。住んでみずして、誰がわかるうというのだろうか。

十三　むすび

さて、私の一生も、山の端に入りかけた月のようで、余命いくばくもなくなつた。もうすぐ三途の闇に向かおうとしている。この期

に及んで、いまさら何を嘆くことがあるのか。仏が教え諭されたことは、何事に対しても、執着してはいけないということである。いま、この草庵を愛するのも、閑寂なくらしにとらわれるのも、往生のさまたげであろう。それゆえ、ここでもうでもいい楽しみなどを述べて、無駄に時間を過ごすことはやめるとしよう。

静かなる暁に、この道理を思い続けて、自分で心に問うてみるに、「世間をのがれて、山林で暮らすのは、心を修めて、仏道を行おうというためである。それなのに、おまえは、姿は僧侶であるのに、心は濁りに染まっている。住居は浄名居士にあやかっているものの、その行ないは、最低の仏弟子である周利槃特のそれにもおよばない。それというのも、もともと前世からの貧賤のむくいが悩ませているのか、それともまた、迷いの心が起って来て、狂わせているのか。」そのとき、私の心は、何一つ答えることがなかった。ただ、口の中で、何気なく「南無阿弥陀仏」と念仏を二三遍唱えただけであった。

ときに建暦二年、三月の晦日ごろ、桑門の蓮胤、外山の庵にてこれを書きしるす。

九 方丈の庵室

ここに六十という露の命の消えぎわになって、また新しく露の葉の宿るような庵をむすんでみた。いわば、旅人が一夜の宿を作り、年をとった蚕の繭を作るようなものだ。これを、中年の頃に暮らししていた住居に較べると、その百分の一にも足りない。とかく言ううちに、年齢は年々高くなり、住居は次第次第にせまくなつていった。その家の様子が、世間の尋常のものとは全く違っている。広さは、わずかに方丈、つまり四畳半。高さは、七尺たらずである。そこに住みつくときめたわけではないから、敷地をとることもない。土台を組み、屋根を葺き、その継目ごとに掛金をかけた。もし気分がそぐわぬことがあれば、すぐに他所へ移すためである。また建てなお

すのに、どれほどの面倒があるうか。木材を車に積んでも、せいぜい二台にすぎない。車をひいてもらう礼をするほかには、何の費用もかかりはしない。

いま日野山の奥に姿を隠した後、庵の東側に三尺あまりの庇をさし出して、薪を燃やして炊事をするところにした。南側に竹の簀の子を敷き、その西の方に仏に水や花を供える闕伽棚をもうけ、北側には、ふすま障子を隔てて阿弥陀仏の絵像を安置し、そばに普賢菩薩の画像を添え、その前に法華経を置いた。東側の端の方には、わらびの穂を敷いて、夜の寝床とし、西南に竹の吊り棚をこしらえて、黒い革籠を三箱をおいた。それには、和歌、音楽、往生要集などの書物の類を入れてあり、その傍らに、琴、琵琶をそれぞれ一張ずつ立てかけてある。折り畳んだり取り外しができるいわゆる折琴、継琵琶というのがこれである。仮の庵のありさまは、このような具合である。

なおその場所の様子を言うと、庵の南に懸樋があり、岩を立てめぐらして、水を溜めてある。林がすぐ軒から続いているので、薪をひろうのにも困らない。この山を音羽山と言う。まさきの蔓草がびっしりと茂っている。谷は木がよく茂っているが、西の方だけが開けているので、西方の極楽浄土を思い描くには不都合はなかった。

一〇 いおりの四季

春は、一面の藤の花房を見る。阿弥陀来迎の紫の雲のごとき様子で西方に咲き匂う。夏は、郭公の声を聞く。その声を聞きたびに、死出の山路の道案内を頼むぞと契りをかためる。秋はまた、ひぐらしの声が耳に満つる。それは、はかない空蝉のような世の中を嘆いているように聞える。そして冬には、降り積もる雪をしみじみとながめる。積もったり消えたりするさまは、人間の罪や欲念にも例える

ことができよう。

もし、念仏をとなえるのに気が進まず、読経に身がはいらない時には、気ままに休んだり自然にまかせて怠ったりするが、それをさまたげる人もなく、また恥ずかしく思う相手もない。ことさらに無言の行をしなくても、一人でいるから、口の禍いの罪を作ることもない。必ずや仏の禁戒を守ろうとするわけではないが、戒めを犯す環境にないのだから、何も破りようがないのである。

もし、古歌にいう「跡の白波」のようなはかない気分に身をおいてみるような朝には、はるかに宇治川に行き交う舟をながめて、その歌の作者、満沙弥を気どり、あるいはまた、桂の風がその葉をならす夕暮れには、かの白楽天の尋陽の江で琵琶を弾じたという故事を思いやり、桂大納言源経信の風情をまねるのである。もし、もつと興がのれば、しばしば、松風の響きにさそわれて、秋風楽の曲を奏で、流れる水の音に、流泉の秘曲を弾ずる。つたないものではあ

るけれど、他人の耳を喜ばせようとするわけではない。独りで奏で、独りで歌って、自らの心を慰めるだけのことなのである。

十一 山居の生活

また、この山のふもとに一軒の柴で葺いた庵があるが、そこには山守が住んでいる。そこに子供がいる。時々やって来て、お互いに顔を見せ合う。もし、所在ない気分するときには、この子を相手に遊ぶのである。かれは十歳、こちらは六十、その年齢はかけ離れてはいるが、心を慰めることでは、ふたりとも同じである。

あるときは、ちがやの花を抜き、岩梨をとり、ぬかごを盛り、芹を摘む。また、あるときは、山すその田圃におりて、落穂をひろい集めて穂組を作ったりもする。もし、うらかな日ざしだと、峰によじのぼって、はるかに都の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽東師を眺める。景色のすぐれたところは持主がないから、いくら眺

めても、気がねはいらない。

歩くのが苦にならず、もつと遠くへ行つてみたいと思つた時には、ここから峰続きの炭山を越え、笠取山を過ぎて、岩間の観音にまいり、あるいは石山寺をおがむ。それからまた、栗津の原をふみ分けつつ、蟬丸の翁の旧跡をたずね、田上河を渡つて、猿丸大夫の墓を訪ねる。帰り道には、季節によつて、桜の枝を手折り、紅葉をもとめ、蕨を摘み、木の実をひろいなどして、仏に供えたり、みやげにしたりする。

もし、夜静かならば、窓辺の月に亡き人を偲び、猿のさけび声に袖を濡らす。草叢の螢は、遠く宇治の槇島のかがり火に見まごうほどで、暁に降る雨の音は、おのずと、木の葉を吹きちらす嵐のようにも聞える。山鳥がほろほろと鳴く声を聞けば、あれは父親だろうかそれとも母親だろうかと思ひやり、峰の鹿が馴れて近寄つて来るにつけても、世間から遠ざかっているほどを感ずる。或いはまた、

埋火をかき起こして、老の寝覚めの友とする。そんなに恐ろしい山でもないから、ふくろうの声などを、趣深く聞くにつけても、山中の風情は、折りにつけて尽きることがない。まして、より深く物事を考え、知識があるような人ならば、はるかにいろいろの楽しみが味わわれるであろう。

十二 閑居の気味

もともと、ここに住み始めた時は、ほんの少しと思っただけで、もうすでに五年もたった。仮の庵も、いくらか古くなって、軒に朽ちた葉が深く積み、土台にも苔がはえた。ふと、何かの折に都の様子を耳にすると、私がこの山に籠つてのち、高貴な方がなくなったのも多くあるということだ。まして、名もない人々については、数えきれないほどである。度々の火事で焼けてしまった家も、またどれくらいあるだろうか。

それを思うと、この仮の庵だけは、長閑で、何の恐れもない。家はせまいながら、夜に寝る場所もあるし、昼間すわるところもある。わが身一身を住まわせるのに何の不足はない。やどかりは、小さい貝殻を好む。それは身のほどをわきまえているからである。みさごという鳥は、荒磯に住む。それも、人を恐れるからだ。私もまた同じことなのである。身のほどをわきまえ、世間を知っているから、何かを求めてあくせくもしない。ただ静かなことを望みとし、憂いがないことを楽しみとしている。

すべて世の人々が、住家を作るのは、かならずしも自分のためばかりではなく、あるいは妻子や一族のために作り、あるいは、親しい者や友人のためにも作る。時には、主人や先生、さらには財宝、牛馬のためにさえ、これを作る。わたしはいま、自分自身のために庵を結んだ。他人のためには作らない。なぜかといえ、今の世の姿、わが身のありさまでは、ともに暮らす者もなく、頼みとできる

使用人もいない。たとえ広く作ってみても、そこに誰を住まわせ、誰を置くというのだろうか。

そもそも、世間で友人というと、金持ちなのをたつとび、恵みをかけてくる者を第一にする。かならずしも、情けが深いことや正直なことを愛するわけではない。そのようなことを考えるにつけ、音楽や自然の雅びを相手にしている方がよほどましだと思う。

また、使用人というものは、褒賞が厚く、恩恵を多くかけてくれることが先になる。いたわって目をかけたりすることや、心の安らかな静かさなどということを、願うことはほとんどない。それゆえ、自分自身を使用人にするのが一番いいということである。どういふふうに住用人にするのかと言えば、もし、なすべきことがあれば、自分自身の身体を使うことだ。面倒くさくもあるが、他人を指図し、他人に気がねをするよりは、よほど気楽である。もし、歩かなければならない場合は、自分で歩く。苦しいかもしれないが、馬だ鞍だ、

牛だ車だと心を悩ますよりも、はるかにましである。

今、身体全体を分けて、二つのはたらきをさせている。手の召使と足の乗り物とで、これは自分の意のままになる。身体の苦しさは知ることができるから、疲れた時は休ませ、元気な時は使う。使いはするが、度を過ぎすことはない。怠けるようなことがあっても、心をいらだたせることはない。その上、常に歩き、常にはたらくのは、健康をたもつ養生にもなる。だから、無為に休んでいることはない。他人を悩ませるといふことは、はなはだ罪つくりなことであるから、どうして他人の力を借りるべきといえようか。

衣食の類いも、またおなじである。藤蔓の皮の衣や麻の夜具などの粗末なものでも、手に入ったものは何でも身に着けて肌を隠し、野辺に生えている嫁菜や山になる木の実で、どうやら命をつなぎとめるばかりである。人と交わらないから、おのが姿を恥じて、後悔することもない。食物がとぼしいので、粗末ないただきものをかえ

つておいしく味わうことができる。

すべて、このような楽しみは、富める者にむかつて言うのではない。ただ自分自身にとつての、昔と今との生活を思いくらべて申し込んでいるのである。

一体、この世の中は、心の持ち方次第でどうにでもなるものである。心がもし安らかでなければ、多くの家畜や七色の宝なども役に立たず、立派な宮殿や楼閣も価値がない。今、私は、さびしい住居、一間の庵を心からこれを愛する。何かのついでに都にでも出れば、わが身が乞食同然の姿となったことを恥ずかしいとは思ふが、帰つて来てここにいれば、世間の人たちが、俗塵にまみれて駆けまわっていることを憐れに思う。もし、わたしのこの言葉を疑うならば、魚と鳥とのありさまを見るがいい。魚は水に飽きないが、魚でなければその気持ちはわかるまい。また鳥は林にいたがるが、鳥でなければ、その心持ちはわかるまい。世間から離れて独り静かに暮らす

あじわいも、またおなじことなのである。住んでみずして、誰がわかろうというのだろうか。

十三　むすび

さて、私の一生も、山の端に入りかけた月のようで、余命いくばくもなくなった。もうすぐ三途の闇に向かおうとしている。この期に及んで、いまさら何を嘆くことがあるか。仏が教え諭されたことは、何事に対しても、執着してはいけないということである。いま、この草庵を愛するのも、閑寂なくらしにとらわれるのも、往生のさまたげであろう。それゆえ、ここでどうでもいい楽しみなどを述べて、無駄に時間を過ごすことはやめるとしよう。

静かなる暁に、この道理を思い続けて、自分で心に問うてみるに、「世間をのがれて、山林で暮らすのは、心を修めて、仏道を行おうというためである。それなのに、おまえは、姿は僧侶であるのに、

心は濁りに染まっている。住居は浄名居士にあやかっているものの、その行ないは、最低の仏弟子である周利槃特のそれにもおよばない。それというのも、もともと前世からの貧賤のむくいが悩ませているのか、それともまた、迷いの心が起って来て、狂わせているのか。」

そのとき、私の心は、何一つ答えることがなかった。ただ、口の中で、何気なく「南無阿弥陀仏」と念仏を二三遍唱えただけであった。

ときに建暦二年、三月の晦日ごろ、桑門の蓮胤、外山の庵にてこれを書きしるす。